様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ２１４２２

研究課題名（和文）正統医学と代替医療の境界設定にみる近代医学の形成

研究課題名（英文）Boundaries between Orthodox Medicine and Alternative Medicine

研究代表者
黒崎　周一（Kurosaki, Shuichi）

明治大学・文学部・兼任講師

研究者番号：１０７７２２４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，近年の医療不信の高まりを背景に注目を集める一方で，疑似科学との批判もつきまとう代替医療を事例として，そもそも科学とは何であるのかという問題を，歴史的に考察する取り組みである。この問題に関して従来の研究は，正統医学が代替医療を排斥し，両者の間に境界線を構築する過程に注目する傾向があった。これに対し本研究は，ヴィクトリア朝イギリスで，代替医療を含めた自由競争を支持するか否かが，科学的な態度と非科学的な態度の分かれ目になっていたことを明らかにした。これは現在も続く，正統医学と代替医療の論争を理解する一助となろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年，世界中で隆盛を極める代替医療に対しては，これを科学的な医療の実現の障害とみなし，「根拠に基づく医療（EBM）」の基準に照らして淘汰しようとする動きが活発である。しかしその一方で，そもそも科学的な医療とは何か，科学とは何かという，より根本的な議論が置き去りにされているという指摘もある。そこで本研究は，正統医学と代替医療の境界線の構築をめぐる歴史的な経緯を明らかにすることで，この科学的な医療とは何かという問題への理解を深める一助となることを目指した。

研究成果の概要（英文）：　In this study, I examine the formation of scientific medicine in Victorian Britain with particular reference to the conflicts between homoeopathy and orthodox medicine. To clarify the definition of scientific medicine, orthodox physicians expelled homoeopathic practitioners from hospitals, medical journals and societies. Furthermore, criticising the dogmatism of homoeopathy, they labelled it as ‘medical heresy’. However, there was persistent opposition to this exclusion even among orthodox physicians.Many people thought that clarifying the boundaries would harm the project of making medicine scientific.
It is certain that there was fierce competition between homoeopathy and orthodox medicine. However, the demarcation lines between them were not the only issues. For the purpose of making medicine scientific, doctors in Victorian Britain had to express a degree of tolerance of homoeopathy. This study will be published in summer 2019.

研究分野：近代イギリス医学史

キーワード：イギリス史　西洋史　医学史　境界設定

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

医療不信の高まりを背景に関心を集める一方で，疑似科学との批判が絶えない代替医療を事例として，科学とは何かという問題に歴史的な観点から取り組もうとした。

２．研究の目的

19 世紀イギリスのホメオパシーを事例に，科学と疑似科学との境界設定問題の歴史的経緯を考察すること。当時のホメオパシーの真偽をめぐる論争は，同時に未だ曖昧であった科学的医学の定義を明確化する試みでもあった。よって正統医学がどのようにホメオパシーを批判し，これにホメオパシー支持者がどう応じたかを分析して，科学的医学の形成過程の一端を明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

上述の課題に 4 つの視点から取り組んだ。

（1）正統医学側からのアプローチ

まずホメオパシーを「非科学的」と断じ，排除しようとする正統医学の活動を取り上げた。正統医学は一貫してホメオパシーの効用を否定し続けていた。そして医学雑誌上でこれを糾弾するだけにとどまらなかった。倫理規約でホメオパシー支持者との接触を禁じ，彼らを医学会，病院などから排斥していったのである。そこで，正統医学がこうした活動をどのように正当化し，ホメオパシーとの差異化を図ろうとしたのかを考察した。

（2）ホメオパシー側からのアプローチ

ホメオパシー支持者の大半は，ホメオパシーを科学とみなしていた。そこで正統医学からの批判を受けて，彼らはそれにどのように反論し，いかにしてホメオパシーの科学としての正当性を擁護しようとしたのかを分析し，従来は自明のものとして捉えられがちであった正統医学の「科学的医学」像について，批判的見地から再検討した。

（3）反セクト主義からのアプローチ

正統医学とホメオパシーとの対立が先鋭化する中で，両者の対立それ自体を批判的に捉える人々が，双方の陣営の中から現れるようになっていた。ホメオパシーの排斥を非科学的な「セクト主義」とみなして批判しはじめたのである。特に正統医学の医師たちの一部からは，ホメオパシーの有効性を否定する一方で，議論を交わすことさえ拒否する姿勢に対して疑念の声が上がっていた。そこでこうした人々の主張に着目し，科学的医学をめぐる論争に与えた影響について考察した。

（4）一般社会からのアプローチ

以上 3 つのアプローチは，医師が主な対象であるが，（4）ではいわば部外者である一般社会の反応をみる。実のところ，一般社会の人々は，両者を区別することに関心を払っていなかった。むしろ正統医学が，倫理規約を盾に病床でホメオパシー支持者との協力を拒んだ場合は，その非妥協的な姿勢を批判することもあった。そうした反応が，正統医学とホメオパシーの境界設定に及ぼした影響も検討課題とした。

４．研究成果

まずヴィクトリア朝イギリス社会において医師が置かれた状況を概観し，どのような医師が，なぜホメオパシーを支持したのか，そして，そのホメオパシー医たちがいかにしてホメオパシーの普及活動を組織化したのかを検討した。当時の医師は，職業的アイデンティティを共有する専門職集団の形成途上にあったが，ホメオパシー医も教育などの面で他の医師と大きな違いはなかった。彼らは自前の協会や病院を設立し，雑誌も創刊したが，「ホメオパシー医」という独自の職業集団を確立する意図はなく，あくまで自分たちを正統医学の一員と考えていた。

次に正統医学のホメオパシー批判と，病院や医師会からのホメオパシー排斥に言及した後，1858 年医師法の制定過程を中心にホメオパシーの非合法化の取り組みとその挫折について分析した。ここでは，特に自由放任主義の影響に着目している。正統医学はホメオパシーの排斥を推進し，その非合法化を目指したが，1858 年成立の医師法がその希望を叶えることはなかった。ヴィクトリア朝イギリス社会は自由放任主義の影響が色濃く，むしろ 1858 年医師法は，「自由競争による科学の進歩」を保証するものになったのである。

続いて焦点を当てたのはチャリティ，特に篤志病院・診療所である。これらを通して，ホメ

オパシー医たちが正統医学との境界を打破しようとする過程と，それに対する地域社会の反応を考察した。各地に点在するホメオパシーの篤志病院･診療所について，地域社会の人々は概ねその活動を肯定的に評価していた。人々は多くの場合，ホメオパシーと正統医学の違いに関心を払わず，地域の貧民救済への貢献を評価していたからである。他方で，ホメオパシーは正統医学を標榜する施設から排除されていたものの，そうした排斥には，「自由競争による科学の進歩」を阻害する「非科学的」な振る舞いとして批判される危険がつきまとっていた。

この他には，医師と同じくヴィクトリア期に専門職化を進めていた薬剤師に着目し，医療の商業化が境界設定に及ぼした影響についても検討した。彼らにとってホメオパシーは，見逃せない商機であった。専門職化の熱心な支持者でさえ，ホメオパシーを否定しつつも，その販売を取り止めはしなかったのである。その結果，世間には様々な「ホメオパシー商品」が氾濫して，正統医学が構築しようとしていた境界線を曖昧にし，ホメオパシー医も，自分たちの思惑を超えて「ホメオパシー」が広まることに懸念を抱いていたのである。

さらには，イギリスのホメオパシー医たちがハーネマンの体系化した理論をどう受容していたのかという問題も検討の対象とした。彼らはハーネマンの理論の全てを肯定せず取捨選択を行っていた。その上で，自分たちの意向に沿ったハーネマン像を構築し，顕彰していたのである。その際に強調されたのは，「科学的治療の創始者」としてのハーネマン像であった。つまりホメオパシーの基本原則である「類似の法則」を科学的治療が実現する鍵とみなし，ホメオパシー支持の主な理由としていたのである。

また，ホメオパシーと正統医学との学術的交流にも目を向けた。それは正統医学にとって禁忌であったが，互いの門戸は完全には閉ざされておらず，非常に慎重な形で情報の交換が行われていた。それを促したのは，正統医学の医師が抱く危機感である。彼らもまた，ホメオパシー医と同じく科学的治療の必要性を痛感していた。それなしには，科学的医学が確立されないと考えたのである。そこで正統医学の医師は実践的な指針として，治療に関する法則性を探求しはじめた。その結果，ホメオパシー医と学術的交流を図る場合もあったのである。

加えて，正統医学によるホメオパシー医の排斥，つまり社会的な境界設定に対する世論の反発を，ある政治家の死にまつわる騒動から検討した上で，さらに正統医学の内部でも，そうした排斥に反発があったことを明らかにした。ヴィクトリア朝イギリスでは，境界設定の試み自体が「非科学的」と評される恐れがあった。ホメオパシーを排斥し，これに「異端」のレッテルを貼ることは，科学にセクト主義を持ち込むことであって，それは「科学的」な態度ではないというのである。そうした批判はかけ声倒れには終わらず，複数の地方の医師会でホメオパシー医の会員資格を認める動きが起きていたのであった。

総じてヴィクトリア朝イギリスでは，一般の人々はおろか正統医学の医師たちの間でさえ，ホメオパシーの排斥による境界設定への忌避観が存在していた。科学的医学の確立に際して，国家による正統医学の保護よりも「自由競争による科学の進歩」を尊重する一般社会の声は根強いものがあった。その背景にあったのは，医学の有用性に関する不信感である。

一般の人々は多くの病気に対し医学が役に立たないと考えていたが，正統医学の医師にもそうした危機感があった。ゆえに彼らは科学的治療を追求し，時にホメオパシーとの学術的交流という禁忌を犯すことも厭わなかったのである。当時の医学が置かれていた状況も，ホメオパシーと正統医学との境界を曖昧にしていた。さらに境界設定のために正統医学が採用した戦略と，それに対抗したホメオパシーの方策も，境界設定の問題に影響を及ぼしていた。

自由放任主義は，当時の医学が置かれていた状況や，ホメオパシーと正統医学の双方の境界設定をめぐる戦略とも連動しながら，科学的医学の在り方を規定していた。ヴィクトリア朝イ

ギリスにおける科学的医学は，ホメオパシーの排斥によってのみならず，そうした「他者」の存在を許容することで設定される境界線，いわば「寛容」と「不寛容」の境界線によって規定されていた側面があったといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1　件）
①黒﨑周一「ハーネマンとは何者か？：ヴィクトリア朝イギリスにおけるホメオパシーの需要と再構築」『駿台史学』査読有，第158号，51-73頁，2016年。

〔学会発表〕（計　2　件）
①黒﨑周一「商機としての異端医学：ヴィクトリア朝イギリスのホメオパシーと科学的医学の形成」社会経済史学会・全国大会，慶應義塾大学（東京），2017 年 5 月。
②黒﨑周一「ディズレイリの死とホメオパシー：ヴィクトリア朝イギリスの科学的医学に関する一考察」身体・環境史研究会，同志社大学（京都），2017 年 7 月。

〔図書〕（計　1　件）
①黒﨑周一『ホメオパシーとヴィクトリア朝イギリスの医学：科学と非科学の境界』刀水書房，2019 年 6 月刊行予定。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。